
またかの関

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

またかの関

【Nコード】

N65490

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

何度も勸進帳を演じる市川団十郎。それは何故か。江戸時代から十八番はあります。勸進帳はとにかく数多く上演されています。

第一章

またかの関

「おいおい、好きだねえ」

「成田屋もね」

「全くだよ」

歌舞伎の芝居小屋の前でだ。皆いささか呆れていた。

「前も勧進帳やったよな」

「それで今もな」

こう話をするのであった。いなせな法被姿や着流しの彼等はだ。

気風よさそうな顔をしているがそこに呆れた苦笑いを浮かべて話していた。

「何でこつ勧進帳好きなのかね」

「またかの関だよな」

ここでこの言葉が出て来た。

「本当にな」

「またかの関？」

「何だよそれ」

「だから。安宅の関だろ」

勧進帳のその関所の場面である。そこを舞台にして義経主従が富樫と対峙し弁慶が主の為に動くのである。

その安宅の関にかけてだ。二人は話すのだった。

「それだろ？」

「安宅の関だからか」

「それでか」

「それでなのか」

「ああ、それでまたやるしな」

その勧進帳をというのである。

「だからまたかの関なんだよ」

「そうだな。本当に多いからな」

「幾ら成田屋のお家芸って言ってもな」

「十八番でも助六とな」

この題目も話に出た。この江戸を舞台にした演目の中でも最も人氣があるものだ。主人公の助六は歌舞伎の登場人物の中でも最もエド庶民に愛されている人物の一人だ。

「並ぶけれどな」

「それでもちよつとなあ」

「やること多いよな」

「全くだ」

しかし何だかんだで彼等は今日も見るのであった。歌舞伎の芝居小屋は今日も満員だった。

そしてだ。その楽屋裏ではだ。

白粉を落としても整った、実に目鼻立ちの引き締まった端正な男がいた。鬚の結い方も実に粋で姿勢も身なりもいい。彼こそがだ。

「いやいや団十郎さん」

「お疲れ様でした」

すぐに周りから声をかけられる。

「弁慶、お見事でしたよ」

「本当に」

「ああ、そうか」

この男こそ市川団十郎である。言うまでもなくこの江戸の歌舞伎において最も名の知られた役者である。江戸はおるか上方でも知らぬ者はない。

その彼がだ。周りの言葉を受けていた。そうしてだった。

「そう言ってもらえるとな」

「はい」

「どうですか？」

「俺としてもそれで気分がいいな」

笑っての言葉だった。

「本当にな」

「そうですか。それにしても今日の勸進帳はその勸進帳の話になった。」

「見事でしたね」

「ええ。もうそれは」

「そしてだ。ある者がこう言った。」

「もう極めましたね」

「極めた？」

「団十郎はその言葉に眉をびくりと動かした。」

「そしてだ。あらためてその言葉に問い返した。」

「極めたと思うか」

「今日の舞台も見事だったじゃないですか」

「その言葉を出した男がまた笑顔で言った。」

第二章

「特に義経を打つあの場面」

「そう思うか」

「って違うんですか？」

「今日の舞台は最低だったな」

「団十郎は首を横に振って言ったのだった。」

「本当にな」

「最低？そうですか？」

「違うよな」

「なあ」

その男だけでなく他の連中もそれぞれ顔を見合わせて言い合う。

「今日の演目はかなりよかったけれどな」

「酒を飲む場面でもな」

「見得の一つ一つも」

「いや、どれも駄目だった」

「まだ言う団十郎だった。そしてだ。」

「彼はだ。また話した。」

「あんなのではな。お客さんに申し訳がない」

「ううん、そうなのですか」

「あれでなのですか」

「そう仰いますか」

「そうだ、今日のはどうしようもなかった」

「また言う彼だった。」

「何度も何度もしているがな」

「それでも？」

「それでもなんですか」

「勧進帳は奥が深いんだ」

「こつ話す。」

「何度やってもな。わかるものじゃないんだ」
「うっん、そういうものですかね」
「充分じゃないんですか、まだ」
「うちの家は代々やってきてるがな」
勧進帳は十八番の一つである。十八番は成田屋、即ち市川団十郎の家の芸に定められている。それだけに代々演じてきているのである。

それについてだ。団十郎は話す。

「それでも全然駄目だな」

「駄目なんですか？」

「何か何もかもが駄目って感じなんです」

「弁慶も義経も富樫も生きてるんだ」

団十郎はまた話した。

「それを完全に演じる、いや」

「いや？」

「まだ何か」

「その弁慶達になるんだ」

こっ周りに話した。

「そうならないと駄目なんだよ」

「うっん、何かよくわかりませんが」

「それは」

「どういうことなんですか？」

「俺も口では言ってるがな」

団十郎はいぶかしむ彼等に対してまた話した。

「それでも頭でもよくわかってないしな」

「頭でもですか」

「そうなんです」

「ああ、心じゃもつとわかってないな」

自分で考える顔になってだ。そして話していく。

「全然わかってないな」

「その弁慶達になる」

「そういうことなんですか」

「勧進帳は」

「それを言ったのは確か」

団十郎は袖の下で腕を組んでだ。そして言った。

「初代だったな」

「ああ、あの元禄の」

「あの人ですね」

「ああ、初代の市川団十郎な」

今では伝説になっっている役者である。歌舞伎を今の時代のものにしたと言ってもいい。坂田藤十郎と並ぶ存在として知られている。

第三章

「あの人が言ったんだったかな」

「それで初代はなれたんですか？」

「その弁慶に」

「いや、なれなかつたらしい」

「そつだというのだった。」

「どうやらな」

「そつなんですか」

「初代も」

「初代は俺以上に威張った人だったそつだがな」

その気性は強く自信家だったと言われている。それで周囲と衝突することも多くそのせいで刺し殺されたとさえ言われている。

「それでも勧進帳ではな」

「それができなかつた」

「そつ言つてたんですか」

「ああ、弁慶になれなかつたつてな」

「じゃあ当世は」

「やつぱり」

「なつてないから今こつ言つてるんだよ」

まさにそつだというのだった。

「こつな。勧進帳だけじゃないがやつぱりあれは何度やつてもなれないんだよ」

「だから何度も演じられてるのですか」

「それで」

「そつだよ。何度でもやるさ」

團十郎は言つた。

「弁慶になるまでな」

「わかりました、それでは」

「弁慶見させてもらいます」

「ああ、頼むな」

団十郎は周りのその言葉に笑顔を見せた。そうしてだった。そのうえでだ。その彼等に話した。

「それじゃあな」

「ええ」

「何ですか？」

「何か食いに行くか」

こつ彼等に声をかけた。

「寿司でもな」

「ああ、いいですね」

「これと一緒にね」

一人が楽しげに笑って右手を自分の口の前でくい、とやってみせた。その動作だけで何のことか誰もがすぐにわかった。

「やりますか」

「そうするか。じゃあ今から行くか」

「ええ、じゃあ」

「寿司と酒を」

「勿論俺のおごりだ」

団十郎はまた笑って話した。

「飲むのも勧進帳の稽古のうちだしな」

「飲みますからね」

「だからですね」

「そうだよ、飲むからな」

勧進帳には飲む場面もある。富樫から選別に勧められるのだ。そしてそれを飲むのである。

その場面について話してだ。そのうえでだった。

しかしだ。ここでまた一人が言った。

「あの、ひよつとして」

「んっ、何だ？」

「あの場面って本当に酒を飲んでるんですか」

「ああ、そうだけ」

団十郎は楽しげに笑って話した。

「いつもな。本物の酒を飲んでるんだよ」

「そうだったんですか」

「本当に飲んでるんですか」

「ああ、歌舞伎は本物をやるからな」

だからだというのだ。

「だから蕎麦って本物だろうが」

「ううん、飲んで最後まで演じるのは」

「やっぱり凄いですね」

「さて、じゃあ今度は寿司と一緒に飲むか」

こんな話をしてだ。団十郎は周りを連れて寿司と酒を楽しみに向かった。これが文化文政の頃の話である。

第四章

しかしそれで終わらずだ。今もだった。

勧進帳を見てだ。ある学者が言った。

「ううん、やっぱりな」

「やっぱり？」

「何かあるんですか？」

「勧進帳は難しいね」

舞台の後でだ。学者は銀座の寿司屋に入ってそこで友人達と話していた。その木の香りがしそうな綺麗な店の中でだ。まずは卵を食べながら話すのだった。

「本当にね」

「そうですね？」

「あれってそんなに難しいんですか」

「言う程」

周囲はその学者の言葉に怪訝な顔になった。それで言うのだった。

「しょっちゅうやってるし」

「しかもやってることは一緒だし」

「もうわかってるしね」

「それでなんですか」

「じゃあ言うけれど」

学者はその彼等の言葉にこう返した。

「このお寿司だけどね」

「ええ、寿司ですか」

「それに何が」

「卵を焼くのもジャリも凄く難しいじゃないか」

寿司の難しさはもう言うまでもなかった。伊達にお茶三年、ジャリ三年、そしてネタ三年と言われているわけではない。そこまで難しいのだ。

「そうだろ？」

「ええ、まあそうですね」

「それは」

「寿司は」

「それと同じなんだよ」

「そうですね」

「勧進帳はね」

「そんなにですか」

「難しいって」

「そうさ、しょっちゅうやってるけれどそれでも難しいものなんだ
そしてだ。今度は細かい話をするのであった。」

「弁慶が文を読む場面も富樫からその白紙を隠す場面も」

「あそこもですか」

「そして義経を打つ場面、あそこだね」

「勧進帳でも特に有名な場面である。義経主従と疑われないように
する為にだ。あえて主である義経を打って疑いを晴らすとする場
面だ。」

「弁慶の忠義はわかってるね」

「絶対ですよ」

「もうそれは」

「そうですね。絶対なんだよ」

「このことが強調された。」

「その絶対の忠義を持っている彼が主を打つんだ」

「普通はできない、それでも」

「その主の為にあえて打つ」

「その心を、ですね」

「そう、心を出さないといけないんだ」

「まさにそれだということだった。」

「その弁慶の心をね。お客さん達に見せないといけないんだよ」

「そこがなんですか」

「難しいんですね」

「その通り、これは弁慶だけじゃない」
「彼だけではないというのであった。」

第五章

「富樫もいるね」

「義経主従だとわかっていてもあえて見逃す」

「その心に打たれて」

「それで」

「お客さんだけでなく富樫の心も打たないといけないんだ」
「その彼のもだというのだった。」

「富樫は生きているんだからね」

「既に富樫は心を持っている」

「だから」

「そして弁慶も心を持っているんだ」
「彼もだというのだ。」

「当然義経もね」

「では心を演じないといけない」

「勧進帳はそういう話なんですか？」

「つまりは」

「いや、演じるというよりは」

「少し違つと。言葉のニュアンスはそうしたものだった。」

「あれだね。弁慶と一つにならないと駄目なんだよ」

「一つにですか」

「そうならないとなんです」

「その通りだよ。だから難しいんだ」
「だからだというのだった。」

「それでなんだよ」

「ううむ、大変ですね」

「それを考えると」

「おいそれと軽くは見られませんか」

「何故あれだけ上演されるのか」

その上演数の話にもなった。

「訳があるんだよ」

「成程ね」

「いや、今日はいい勉強になりました」

「全くですよ」

「そう言ってくれると有り難いよ。それじゃあ」

話を終えた学者はだ。表情をこれまでの真摯な、まさに学問を語るものからだ。一転にこやかなものにしてそのうえで仲間達に言うのであった。

「今度は何を頼もうかな」

「そうですね。ここは同じ十八番で」

「あれか」

「ええ、揚巻と」

まずはこれが話に出た。

「それと巻き寿司でどうでしょうか」

「助六か」

「はい、それで」

まさにそれだというのである。

「その二つでどうですか？」

「いいね。それで寿司を食べ終わったら」

「それから」

「吉原にでも行こうかな」

学者は笑ってこんなことも言った。

「いやいや、そっこの店には行かないけれどね」

「けれど行って、ですね」

「助六も楽しみますか」

「流石にあたかの関は無理だしね」

「それでも吉原は行ける」

「だから」

「それでどうかな」

あらためて仲間達に尋ねた。

「銀座の後はそこでね」

「ええ、そうですね」

「じゃあそこで飲みなおしますか」

「蕎麦でも食べながら」

こんな話をしながら楽しむ彼等だった。東京は今も昔もそうしたところは変わらない。劇場の看板にはだ。弁慶が勇壮な最後の退きの姿でそこにいた。あの頃と同じく。

またかの関 完

2010・9・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6549o/>

またかの関

2010年11月1日23時25分発行